3 海女の着衣と道具

海女の着衣

むかしの錦絵を見ると、海女は上半身裸です。海女が白い磯着（いそぎ）を着るようになったのは、明治の中頃（1900年頃）、朝鮮半島へ行くようになり、その地の海女の習俗にならって始まったようです。その後、大正期になり風紀上の理由も加わって定着しました。
昭和30（1955）年すぎ頃から、ゴム製ウエットスーツが着られるようになりました。今日では改良が重ねられ、軽く保温のいい製品になりました。

磯着
磯着は上半身に着る磯シャツと、下に着る磯ナカネ（腰巻）に分かれています。磯シャツは前合わせが以前は貝ボタンでとめてありました。また、磯ナカネは作業中に裾が乱れないように、マタヒボ（紐）がつくようになっており、後にはパンツやこの写真のような磯ズボンも現れました。

ウエットスーツ
冷たい海水中での作業に、長い時間耐えるためゴム製のウエットスーツが普及しました。また、足ヒレも使うようになり、より深く潜れ、より長く漁ができるようになりました。しかし、ウエットスーツを着るとアワビをとりすぎるという理由で地区によっては最近まで禁止していたところもあり、今でも１戸に１着しか許可していない地区や厚さを制限している地区もあります。